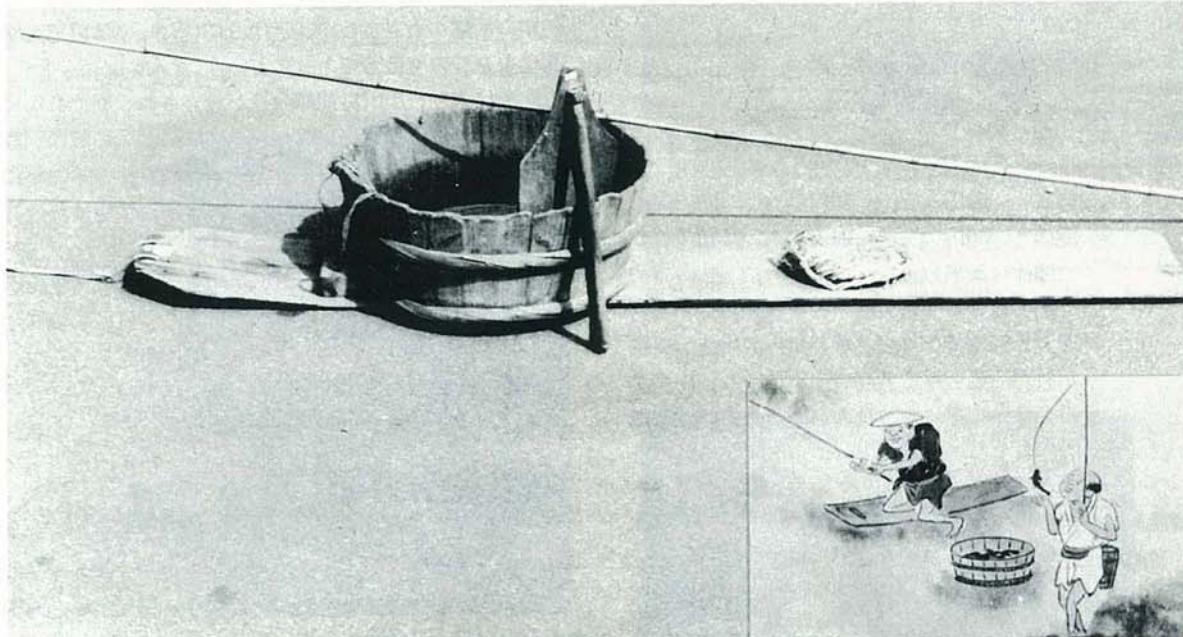


No.20

博物館報



オシイタ　押板　オシオケ　押桶　イタグワ　板鉄　エンザ　円座

有明海は、長崎・佐賀・福岡・熊本の四県に囲まれており、佐賀平野に面する内海である。潮の干満の差が大きく水深がいたって浅く干潮時には沿岸より約6kmにも及ぶ広大な干潟が出現する。

この干潟にはムツゴロウ・ラスボ・ウミタケ・アゲマキ・シオマネキ・シャッパ・メカジャ・ウナギ等が生息しているがいずれも特殊な生態、習性のものが多く、それに応じて捕獲法も獨得な方法が工夫され、特異な漁撈用具が伝承されている。

これらの漁法は、極めて特色あるものであるので民俗学上からも貴重であり、その漁撈用具は重要民俗資料に指定されている。ここに挙げるものは干潟漁撈に広く用いられる一般的な用具である。

オシイタ（押板） 杉の一枚板の先端を反らし、中央よりやや先の方に桶を安定させる横木を取りつけた簡単なものである。このオシイタは、腰までぬかるような軟弱な干潟の漁撈に必要な漁具や、獲物の運搬のための道具であり、潟往来の乗り物でもある。オシオケの上に手をかけ身体を支え、片膝はエンザに当てて他方の足で干潟を蹴って進むのである。

オシオケ（押桶） オシイタの上に乗せて体を支えたり、漁具や漁獲物を運搬する用具にもなる。また、人が乗ってエゴを横切る舟の用をなす大形のものもある。

イタグワ（板鉄） 干潟の棲息孔内にいる魚介類を捕える場合に用いる鉄で、泥土をこの鉄で掘り起し獲物を手取りにする。

目 次

有明海の漁撈具	1
「佐賀の漁撈と水鳥展」	2・3
「日本陶磁のふるさと古伊万里展」	4・5
坂の下遺跡発掘調査概報	6
第15回研究講座	7
博物館日誌・行事お知らせ	8

佐賀県の漁撈と水鳥展

—海辺の生活と自然をさぐる—

主 催	佐賀県立博物館		
会 場	佐賀県立博物館（大展示室）		
会 期	昭和49年5月10日～6月9日 (9時から16時30分まで)		
休館日	毎週月曜日		
観覧料	大人	大・高生	中・小生
	個人	50円	30円
	団体	30円	20円
	(団体は20名以上)		

上記の観覧料で常設展「佐賀県の歴史と文化展」も観覧できます。なお県内の生徒・児童が教育活動として教師の引率により利用する場合は、事前に申し込んでいただければ、観覧料は無料となります。所定の申し込み用紙は当館事務室に用意しております。

漁撈具の展示概要

有明海は、周辺の平野から多くの河川が注ぎ、またプランクトンが豊富であるため魚類や貝類の成育に適している。

沖合には外洋性魚類のサワラ・ヒラ・グチ・ハモ・サヨリ・マボロ・スズキ・クロダイ・ヒラメと多種類にわたっており、また沿岸性の魚類にはハゼ類・グチ・メナダなど、定住するものが多数棲息している。

一方、広大な干潟にはプランクトンが多いため貝類の繁殖に適し、アゲマキ・カキ・アサリ・ハイ貝などの貝類が豊富に棲息している。

これらの魚貝類を捕獲するために、特色ある漁撈法や漁撈具が伝承されている。大別すると干潟漁撈と沖合漁撈に分けられる。

干潮時に、干潟や干潟の中を流れるエゴを舞台にしておこなわれる干潟漁撈には、ムツゴロウとりのタキャッポをはじめワラスボかき・ウナギかき・アゲマキつり・シャッパふみ・メカジャひき・ウミタケねじなどの用具がある。

沖合漁撈は、敷網の類や流し網類・定置網類などがあり網漁を中心である。このほか釣り・のべなわ・潜水による漁法もおこなわれている。

これらの有明海漁撈習俗は風土色に富んだ原始的なものが多いが、近年のノリの養殖業におされて、古来の漁撈そのものが衰退しつつある。

玄界地方には、古くから潜水漁法がおこなわれていた。文禄の役（1592年）の際、朝鮮への水先案内を勤めた功

によりアワビとりの漁業権が名護屋の海士に与えられたとの記録もあり、古い伝統をついで今日もおこなわれている。また、沿岸の漁法にはこ船（ネリ）がある。船上より箱眼鏡でのぞいてアワビ・ナマコ・ワカメの類を探集している。

玄界灘の捕鯨は近世初頭からで、初めは「突き捕り法」であったが、唐津藩土井氏時代（1691～1762）から「網捕り法」へと変わり、呼子に本拠を構えた中尾甚六の鯨組の活躍がめざましく、三代目にいたっては巨富を築き藩主をしのぐほどであったという。

明治に入り、小川島捕鯨会社が設立され、明治41年にノルウェー式捕鯨法が取り入れられたが昭和21年国際捕鯨法によって小川島周辺での捕鯨は終りをつけ、昭和31年にはミンク鯨の権利も売却されて捕鯨活動は終止符をうった。

この展示会には、これ等の漁撈法や漁撈具を博物館所蔵の資料をはじめ有明町教育委員会、名護屋漁業協同組合、呼子漁業協同組合の協力により有明海関係130点、玄界灘関係60点その他関連資料として魚類標本、文書資料を展示する。

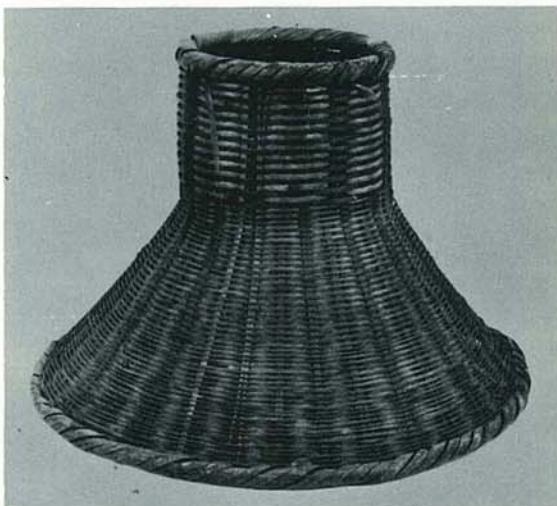
水鳥の実態と展示概要

玄界灘は、夏空にトビやカモメの飛び交う姿をよく見かける。ユリカモメをはじめ大部分のカモメ類は冬鳥であるが、ウミネコは日本海沿岸の島々に繁殖する。島根県経島は集団繁殖地であり、天然記念物に指定されているので、夏季には唐津湾あたりでも、よくみかけられる。玄界灘の荒波は、玄武岩の絶壁や、七ツ釜の海蝕洞をつくり、屈曲の多い沈降式海岸は、大小の島々とともに、景色のすぐれた海岸をつくりあげている。馬渡島へ渡る舟の中から、カツオドリらしい海洋鳥がみられたことがあり、その外にもウミスズメ、アビ、オオハムなどが知られている。ヒメウ、ウミウの冬鳥が馬渡島の岩壁に、白い糞のかたまりとともにその生息が確認された。昭和40年頃、ウが営巣しているのではないかと、調査団が出向いたことがあるが、そのときは繁殖の跡はみられなかった。馬渡島をはじめ小川島、松島、加唐島の島々は、大陸を往来する鳥達など、渡り鳥の通路になっており、珍らしいムラサキサギ、ヤマショウビンや、ブッポウソウの美しい姿がみかけられる。昭和10年頃、伊万里近くで8羽のオオハクチョウがあらわれ、2羽が捕殺されたことがある。

有明海は干潮時に、広大な干潟ができることで、全国的にも有名である。またこの干潟に、いろいろのカモ類、サギ類、シギ、チドリ類、カモメ類が無数に飛来する。そのうちでも、ツクシガモ、ヘラサギ、ヘラシギ、ヅグロカモメは極めて珍らしく、全国的にも注目され、汚染されつつある日本全土の「残された最後の干潟」といわれている。

このような実態にある本県の水鳥の姿を、広く県民に紹介するため、その生態写真と剥製標本によって展示を構成している。主な展示物は、玄界地区にみられるウミウ、ヒメウ、オオハム、クロサギ、セグロカモメをはじめ、有明海のシギ類、シラサギ、アオサギやツクシガモ、ヨシガモ、トモエガモ、ホオジロガモ、ヒシクイなどのガンカモ類などを考へている。

さらに陸性水鳥であるカワセミ、ヤマセミ、アカショウビン、そして全国的に珍稀なヤツガシラも展示し紹介する計画である。



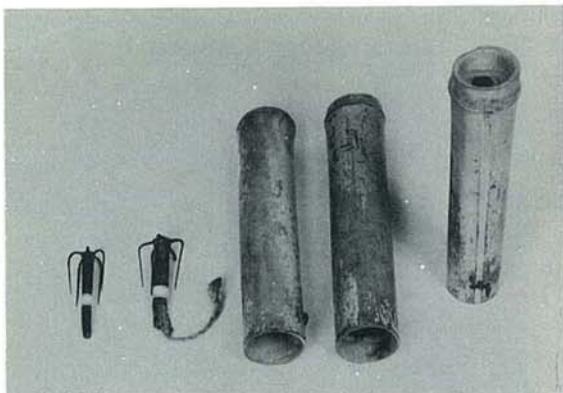
ウザ

口の縁を握り、海水の浅い所で遊泳する魚をめがけておさえ中に入った魚をとる。



ネジボウ

把手の両端を握って泥土中につきさし、把手を回転したのち引き上げ、鉄材にくっついてくるウミタケをとる。



タカッポ

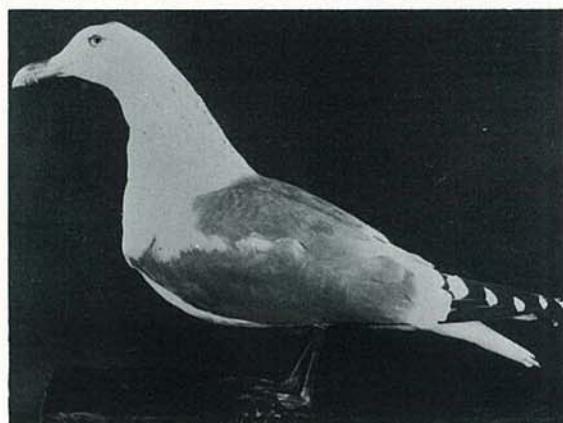
ムツゴロウの棲息孔の上にタカッポの節を上に立てておく、節の孔から光がもれてるので外に出ようとして竹筒の下方につけてある弁を押し上げタカッポの中にとびこむ。

ムツツリ針

棲息孔から出て、干潟上を飼遊しているムツゴロウをこの針をなげて鉤にひっかけて捕える。



コ
サ
ギ



セグロカモメ

有田天狗谷古窯址発掘記念
日本磁器のふるさと
古伊万里展

主 催	佐賀県
	佐賀県教育委員会
	佐賀県立博物館
	有田町
	有田教育委員会
	朝日新聞社
会 場	佐賀県立博物館
会 期	昭和49年 6月23日～7月7日 (会期中無休)
観覧料	大人 大・高生 小・中生 個人 200 150 50 団体 150 100 30 (団体は20名以上)

展示概況

日本磁器の創成期の古窯址として知られていた有田郷、上白川天狗谷窯の考古学的な発掘調査が、さる昭和40年より開始され7次にわたる継続調査の成果が公にされたのを記念して開かれるのが本展である。長い間、謎のベールに包まれた磁器創業窯の天狗谷古窯址の発掘結果は、国内外に話題を呼び、当初、想像されなかった複雑な窯規模と、その内容や、創業開窯年代の新考証をはじめ、最下層より出土した貴重な磁器類は各方面より注目されている。

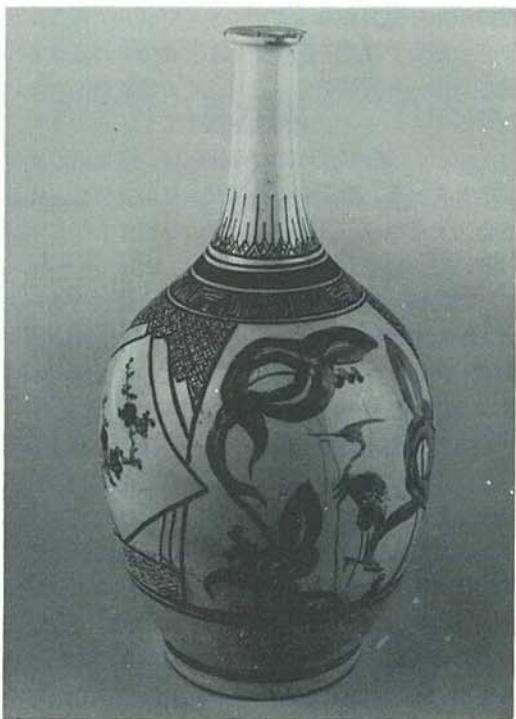
本展は、第1コーナーから第5コーナーによって構成され、まず磁器の創業から、完成期を経過した初期伊万里の優品が展示される。また、初代柿右衛門一族同門によって完成された色絵磁器とその関連資料をはじめ、古伊万里の前期から最盛期の多種多様な伝世品が公開される。

古伊万里は、江戸前期後期にわたってオランダ連合東印度会社によって、長崎出島より海外に積出されたが、その技法は西欧の窯場にも大きな影響をあたえ、倣製品が造られている。本展にはこれら東西窯芸交流の史譜を伝世品と歴史資料の展示によって、一層効果ある理解を深めるような、構成がなされている。

本展は、創業期の古窯址の出土資料をはじめ、120点におよぶ伝世の名品が全国の収集家、愛陶家の協力によって出陳されるので画期的な肥前陶磁史展ともいえる内容である。

主な出品目録

- 初期伊万里染付松梅文瓶
初期伊万里青磁彫文瓶
初期伊万里白磁面取壺
叩き古唐津壺
初期伊万里染付唐草文鳥図平皿 (百間窯)
金ヶ江家旧記覚書
李朝染付牡丹文徳利
豊臣大閤より家永彦三郎へ下付朱印状
初期伊万里釉裏笪文瓶
中国古染付吹墨玉兔文皿
初期伊万里染付吹墨手兔図平皿
青磁透彫文大根図台鉢
金ヶ江家旧記
窯の模型 (天狗谷連房窯)
色絵草花文花鳥図瓶
色絵椿図徳利
色絵芙蓉手花鳥図平鉢
康熙五彩花鳥文平皿
色絵亀甲花詰文角瓶
柿右衛門色絵花蝶図壺
染付唐人松竹梅図角壺
柿右衛門色絵四方割草花文壺
柿右衛門色絵花蝶図輪花形深鉢
色絵鈎釉鳳凰図角瓶
元禄3年土合帳、赤絵之具覚 (酒井田柿右衛門)
御用御注文帳 (酒井田柿右衛門)
色絵麒麟香炉
染錦風俗絵図大壺
染錦花籠手草花割文深鉢
染錦石曆調ようらく文深鉢
染錦荒磯図鉢
染錦荒磯文皿
色絵牡丹菊鳥文獅子牡丹大鉢
色絵九玉文狗犬一対
色絵風俗人形
色絵江戸風俗人形
明朝染付芙蓉手鉢
染付東印度会社社標字文皿
染付草花文葉種瓶
染付花鳥図葉種瓶
色絵風俗図葉種瓶
染錦紅毛人酒壺
染錦花籠手菊花文鉢
古伊万里染錦花籠手菊花文鉢の倣製品
リンデンのかいた幕末出島の市街図写し
V O C 文字入り麻袋



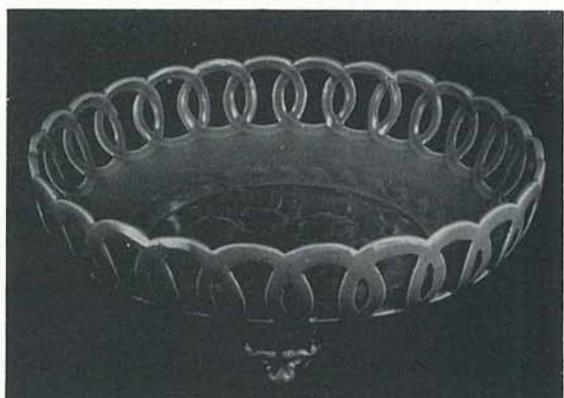
色絵草花文花鳥図瓶



色絵龟甲花詰文角瓶



染錦花籠手草花割文深鉢



青磁透文大根図台鉢



染付東印度会社社標字文皿



古伊万里染錦花籠手菊花文鉢

坂の下遺跡発掘調査概報

—西松浦郡西有田町山本所在—

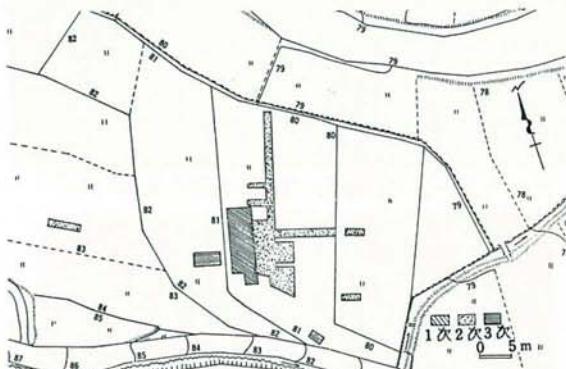
坂の下遺跡は、伊万里湾に流れ込む有田川の支流である淨源寺川によって形成された扇状地の、水田が階段状に開けた標高約80mの西有田町山本字坂の下に位置する。

当遺跡は、昭和42年と昭和45年の2回の発掘調査によって、食糧として使用した木の実を貯蔵する、縄文時代中期末の貯蔵穴跡であることが判明した。

しかし、過去2回の発掘調査は一定区域に限定され、貯蔵穴跡の広がりや、この貯蔵穴を使用した当時の住居等は未確認のため、これらの遺構を確認するとともに、昭和41年の耕地整理以前の地質構造を明らかにし、貯蔵穴構造の解明・貯蔵穴より出土する木の実より発芽の実験、土器や石器の他に数少ない木器の採集等をおこない、当時の生活様式の解明を試みることを目的とし、今回の調査を計画した。

発掘調査は、当館と地元西有田町教育委員会の共催で、西有田町郷土研究会・佐賀大学考古学研究会の協力を得、昭和49年3月6日から3月12日までの7日間、過去2回調査が実施された水田より上段の水田に、東西の方向に2m×4mの試掘溝を設定し調査を進めた。

発掘調査の結果、初期の目的である貯蔵穴は3カ所確認することができた。この3カ所の貯蔵穴は、トレンチ



の壁に接して発見することができ、貯蔵穴の構造をトレンチ壁の断面で確認・記録することができた。さらに耕地整理以前の地質構造も、トレンチの地層断面において確認することができ、明確に記録することができた。

しかし、この貯蔵穴に伴なう住居は、発掘調査面積が狭いこともあり、確認するには至らなかったが、土器や石器の出土量から、近接した場所に存在することが推定される。

出土遺物は、貯蔵穴の中から多量の各種木の実を主体に出土し、木の葉・木片も出土している。土器は縄文時代中期末に比定される、阿高系の派生した文様を有するもので、胎土に多量の滑石粉末を混入する特色をもっており、第2次発掘調査で出土した磨消縄文土器は、今回の発掘調査では出土していない。さらに第1次発掘調査で出土したヘラ調整の顔面把手とは異なり、粘土の帯を練りあげた把手が出土しており、朝鮮半島出土の把手と手法的にも極めて類似するところから、今後の研究が注目されよう。

石器のほとんどは「腰岳産」の黒曜石を使用して製作したものがほとんどであり、大形の石器のみ安山岩を使用している。

今回の発掘調査で、下段水田の南端に東西に1.5m×2mのトレンチを設定し、調査を実施したが、1.5mの深さで岩盤に当り地質構造に変化もみられず、貯蔵穴は確認されなかった。

今後は資料整理・記録整理を急ぎ、今年度中に調査研究書第2集として発刊する計画である。

(学芸課 森 醇一郎)



第15回研究講座

色鍋島の様式美とその技法

県文化財専門委員 永 竹 威氏

国内外を問わず肥前磁器への関心は年々に高まり、ことに江戸時代の鍋島藩窯で制作された染付鍋島・青磁鍋島・色鍋島は、伝世品をとおして美術的な価値が再認識されている。今回の鍋島藩窯展は、ただ単に美術品としての鑑賞の機会であるばかりではなく、鍋島藩窯の歴史的背景や、その変遷推移をはじめ藩窯の秀れた製作技法などを総合的に、身近に学ぶための絶好な機会といえる。

このたびの鍋島藩窯展には、東京国立博物館をはじめ、箱根美術館、栗田美術館、岡山美術館、田中丸コレクションなどの特別出品に加え、県内外の愛陶家の方々の理解ある協力出品による百数十点におよぶ名品のほか、東京鍋島家、鹿島鍋島家の伝世の名器や「御注文絵形」などの貴重な資料が展示されているので研究家はいうまでもなく、茶道、華道に心を傾けられる方々や、愛陶家の間に色々な話題を呼ぶ画期的な展観である。

これまでの肥前陶磁展では最盛期の「色鍋島」を中心に展示されていたが、今回は、「古鍋島」に時代分類される比較的初期の名品に加えて、元禄、享保時代の格調高い未公開の染付類、青磁類、色鍋島類を技法別に、意匠別に分類展示し、あわせて藩窯後期の大鉢類を展示しているので総合的な鍋島藩窯展であり、藩窯の位置づけと、その全貌が理解出来る内容として構成している。

また、鍋島藩政によって運営された藩窯の歴史的裏付けを学ぶにふさわしい「有田皿山代官手頭」「有田皿山代官旧記」「多久家文書」を展示しており、これに加えて精巧無比な色鍋島の製作工程を学ぶための資料や、藩窯史蹟、大河内山の写真資料等が展示されている。

○鍋島藩窯の変遷

江戸時代に入ると諸国諸領の大名領主たちは、自領内の殖産業を振興したが、肥前の鍋島藩は、陶業の振興に意を注いだ。その結果、他藩にはみられない充実した生産機構と組織による藩直営の御用窯を経営した。藩窯のはじまりは、有田内山の岩谷河内窯に藩から陶器方役として副田喜佐衛門日清を派遣した。寛永5年(1638)であって、万治3年(1660)までの30年内外、ここで染付や青磁類を焼成している。その後藩窯は第2期を迎えるが、南川原山に移窯し柿右衛門窯の隣接地域に築窯し寛文初年(1661)から延宝3年(1675)までの10数年間、運営されている。第2期の南川原時代に藩窯の基礎づけがなされたといえよう。藩窯1期、2期ともに特定の組織はなく、藩庁よりの注文書による献上品などの制作に特に陶器方役が意を注いだようである。

鍋島藩窯は延宝3年に秘境大河内山に移窯し第3期を迎え明治4年廃藩置県まで200年の間、定着して運営された。鍋島藩窯の本格的な運営組織はこの期において整備され「陶器方役」の監督の下で御道具山と呼ばれた藩窯には「御細工場」が設けられ、常時、細工方11人、画工9人、捻細工4人、下働く7人の31名が藩窯品の制作に従事したのであった。この他に常時雇用しない御用赤絵屋、御用土伐、御用鍛冶、御用石工、薪方頭取の御用職を定め、窯焚は、御手伝窯焼の制度の下に隨時焼成作業に当らせたようである。御細工場詰の専任の細工人たちは苗字帶刀を許され扶持米をあたえられ優遇されたものの、藩窯の「掟」は厳しく、元禄6年に2代藩主鍋島光茂が有田皿山代官に示達した「手頭」にあるように、たえず藩窯品の質的な向上を計り、肥前全皿山、諸窯場の最高な技術を表現するために心懸けている。

○藩窯品の特色

鍋島藩窯で制作された品種は、特別の場合を除き、将軍家、諸大名などへの献上品、贈答品であり、城中の調度品であり、単独の美術工芸品は稀であって、香炉、香合、文房具類などの装飾性のある調度品の他に主として会席膳用の「組物の食器類」で同一の意匠と同一の絵模様の器類を10客、20客として制作している点を注目すべきである。本展には、藩窯品の径30厘内外、20厘内外、15厘内外の高台皿を1枚、1枚を分類して展示してあるが、制作された時点では「御注文絵形」に基づいた「組物」であった。

藩窯品は、高台皿、高台鉢といって獨得な気品のある整然とした意匠形状を保っているが、胎土の精製、釉薬(ゆうやく)の配合など、如何にも藩窯らしい細密な配慮がなされていることを教えられる。また成形上のきびしい作業が精巧な形と姿を整えていることを学ぶことが出来る。製品は、一応、染付(下絵のみ)と青磁染付、青磁、色鍋島(上絵付)の4種に大別されるが、夫々に格調を保っている。ことに色鍋島は、最後の工程である色絵付を有田赤絵町の御用赤絵屋に依託し藩窯の格調をより精彩な色絵磁器として完成した。鍋島青磁は大河内藩窯に近い三本柳の青磁鉱を用いており、日本の青磁の中では最も安定した優品である。

藩窯品は、染付、色鍋島共に、大名社会の他の工芸品である染織物、蒔絵などの調度品に調和した絵模様(絵形)を充分に考慮し下図を描き絵付している。多分に桃山末期から江戸初期にかけての工芸品の絵模様を陶画化しており江戸中期の「絵手本」などを参考にして夫々の磁器の形状にふさわしい近代的な図案構成を試みているのも藩窯品の特色といえよう。

(昭和49年3月9日当館中展示室での講演内容を要約したものである)

博物館日誌

2月22日	国立西洋美術館小宮勝男氏施設設備調査のため来館	3月8日	蓮池町陣内利夫氏から成富椿屋筆「松に鶴図」1幅寄贈を受ける。
2月24日	「石本秀雄展」終了 (総観覧者数 4,443名)	3月9日	第15回研究講座 (中展示室) 演題「鍋島の様式美とその技法」 講師 県文化財専門委員永竹威氏
2月28日	駒沢大学中島俊教教授、同大博物館学講座受講学生の博物館学実習のため学生13名を引率し来館 (3月5日まで)	3月11日	イスラエル大使来館
3月2日	博物館協議会開催	3月14日	NHKテレビ「話題の窓」で「坂の下遺跡発掘調査」放映
3月5日	「鍋島藩窯展」開場	3月22日	鍋島直紹氏「鍋島藩窯展」観覧のため来館
3月6日	NHKテレビ「話題の窓」で「鍋島藩窯展」放映	3月23日	鍋島直泰氏「鍋島藩窯展」観覧のため来館
3月7日	西有田町坂の下遺跡第3次発掘調査	3月24日	「鍋島藩窯展」終了
		3月30日	定期監査 (委員監査)
		4月1日	西日本新聞社から第4回日展開催を記念して時計塔の寄贈を受ける。 人事異動発令

行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

常 設 展			
佐賀県の歴史と文化展	49年4月1日～6月15日 7月14日～9月1日 12月7日～3月31日	1・2・3号展示室	月 曜 休 館

企 画 展			
展 覧 会 名	会 期	会 場	備 考
佐賀県の漁撈と水鳥展	49年5月10日～6月9日	大 展 示 室	常設展と併設・月曜休館
日本陶磁のふるさと古伊万里展	6月23日～7月7日	3号大展示室	会期中無休
松本弘二遺作展	7月20日～8月4日	大 展 示 室	常設展と併設・月曜休館
東光会展	9月7日～9月16日	1・2・3号展示室	会期中無休
理科作品展	9月15日～9月25日	大・中展示室	"
岡田・久米・百武三人展	9月21日～10月23日	1・2・3号展示室	"
第24回佐賀県美術展	11月2日～11月10日	1・2・3号・大・中展示室	"
松方コレクション展	11月16日～12月1日	1・2・3号・大・中展示室	"
佐賀県高等学校美術展	12月18日～12月22日	大・中展示室	"
新遺跡資料展	50年1月25日～2月23日	大 展 示 室	常設展と併設・月曜休館
肥前名刀展	3月2日～3月23日	大 展 示 室	会期中無休

◎職員移動 (4月1日付)

退職 館長 古賀秀男
転入 館長 大園 弘 (参事室参事より)
学芸課資料係学芸員補 小杉道久
(有田中学校教諭より)

博物館報	第 20 号
発行年月日	昭和49年5月1日
編集	大園 弘
発行	佐賀市城内一丁目15~23 佐賀県立博物館
印刷	合資会社 音成印刷所

佐賀県立博物館